

ウェブサイトのバリアフリー

ウェブアクセシビリティへの取り組み



みなさん、「ウェブアクセシビリティ」という言葉をご存じでしょうか？

ウェブアクセシビリティとは、高齢者や障がい者を含むできるだけ多くの方が、ウェブサイト（ホームページの閲覧等）を不自由なく使えるように配慮することを表す言葉で、言い換えればウェブサイトのバリアフリーと言える言葉です。

今回はNTTクラリティでも事業として取り組んでいるウェブアクセシビリティについて紹介します。

○ネットは生活に不可欠

パソコンの普及やインターネットの出現は、障がい者の生活を大きく変えました。全盲の視覚障がい者は、文字情報を音声に変換する“音声読み上げソフト”を使うことで、新聞記事を読んだり、商品情報を確認しながら買い物をするできるようになりました。

また、外出の難しい肢体不自由者は、自宅にないが買い物をしたり、電話が難しい聴覚障がい者は、ウェブ

サイトを使ってホテルやレストランの予約をしたり、これまで人の手を借りなければできなかったことが自力でできるようになりました。

しかしながら、そのウェブサイトが利用しづらければ意味のないものになってしまいます。そこで、「様々な人がウェブサイトに不自由なくアクセスできるように配慮しよう」として、ウェブアクセシビリティという考え方が生まれました。

○ウェブアクセシビリティの現状

それでは、ウェブサイトにおけるバリアについていくつか説明いたします。

ウェブサイトには写真やグラフ、画像化した文字等、多くの画像が使われていますが、現状、これら画像には説明の「代替テキスト」がっていないことが多く、音声読み上げソフトではファイル名など意味のない文字列を読み上げているため、視覚障がい者には情報が伝わっていません。そのため、画像に対して説明を付けて理解が出来るようになります。

また、入力フォームにおいてよく見受けられる例で言うと、画面上に注意事項として「赤字は必須」と記載があり、住所、氏名など文字を「赤色」で記述していますが、音声読み上げソフトでは「じゅうしょ」「しめい」と読み上げを行い、「赤色」とか「青色」など色まで読み上げはしないため、必須箇所の判断ができません。したがって、住所や氏名の後に「（必須）」と文字で記載すると分かり易くなります。

更には、「住所」など単語間に「住所」とスペースがあると、単語として認識しないため、「じゅうところ」と読み上げを行います。この場合には、スペースを削除し、プログラミングの中でレイアウト調整をすると、正しく読み上げることができるため、見やすい使いやすいサイトとなります。

この他、高齢者や弱視者のために文字色と背景色のコントラストに十分な差をつけることや、聴覚障がい者のためには動画映像に字幕を付けること等、様々な人への配慮が必要となります。

このような配慮をまとめたものとして、日本工業規格「JIS X8341-3:2010」があります。

このJIS規格に基づき、官公庁や公共サービスを提供する企業は、ウェブサイトのバリアフリー化に取り組み、現在、多くの事業者に広がっています。

○ウェブサイトへの対応について

昨年、障害者差別解消法が国会で可決されました。この法律によりウェブアクセシビリティへの取り組みがこれまで以上に求められるようになるでしょう。NTTクラリティでは、ウェブサイトのアクセシビリティ診断やウェブ運営者向けの研修等、バリアを感じている障がい者自身が、ウェブアクセシビリティに関する業務を行っています。

今後、より一層ウェブアクセシビリティへの取り組みが進み、だれもが自由にウェブサイトを利用できる社会になるようNTTクラリティでも取り組んでいきます。

障がい理解研修のご紹介



障がい者との接し方に、とまどいはありませんか？

障がい者と円滑なコミュニケーションを取るには、障がいに対する理解が大切です。NTTクラリティでは、障がい理解研修を実施しております。

それぞれの障がいの特徴、必要な配慮・生活上の工夫等を、講演やワークショップを通して、受講生とコミュニケーションを取りながら分かりやすく紹介いたします。障がい理解することは、決して難しいものではありません。ぜひ一度、体験してみてください。

主な研修内容

- ・手話実技、聴覚障がいに対するミニ講座
- ・視覚障がい者誘導体験、パソコンの読み上げデモ
- ・車いす体験、肢体不自由に対するミニ講座



■お問い合わせ MAIL: toiawase@ntt-claruty.co.jp



対談 小林あかね(福祉アートコーディネーター) × 高橋久美子(NTTクラリティ)

「いい商品」をつくり、たくさんの人に買ってもらう。自分のつくった商品が売り場に並び、知らない人の目に留まる。つくったものに対する思いが強まり、自分の仕事に誇りを持つ。こんな「ものづくり」のよさこびが、はたらく障がい者をばげましている。新潟で、障がい者施設の商品を、デザイン・製作・販売と、すべての面で支援するプロジェクト「koro」として活動する小林あかねさんと、NTTクラリティ塩山ファクトリーで、リーダーとして障がいのあるメンバーをまとめる高橋久美子が、障がい者の「ものづくり」について語り合った。



高橋 (NTTクラリティのカレンダーを手) 今年、こんなカレンダーができました。これに木枠のスタンドがつくんです。

小林 ああ、きれいですね！

高橋 この間、塩山にいらしていただいた時にごらいただいた紙で作ってるんです。

小林 あんなにすべてを手作業ですいているだなんて、びっくりしました。私も今、新潟県内で紙すきをやっている作業所さんのサポートに入っていて。新潟の素材をすきこんだいろんな種類の「新潟レターセット」をつくりたいとがんばっています。

高橋 紙すきって、結構地道な作業なんです(笑)。

小林 あの時、去年つくった紙をつなげていたら皇居まで行けるっていう話が出てましたね。

高橋 その話がメンバーに一番わかりやすかった！何万枚、って言われてもイメージにいいじゃないですか。でも、み

んなが作った紙を全部つなげたら、皇居まで行けるよって言ったら、みんな「おー、山梨を出られるのか」って(笑)。

小林 高橋さんは商品の開発もされるんですか？

高橋 商品開発っていう大きなものじゃないですけど、でも「こういうのあったらいいね」とか「これを入れたらこうなるんじゃない」とか、そういうアイデア出しはよくあります。新しい商品はいつもなにかしら考えています。なぜって、みんなすぐ新しい仕事をやりたがる(笑)。

小林 新しいもの好きなんだ(笑)。

高橋 飽きっぽいというのじゃなく、興味があるんです。だから新しい商品をつくるとテンションが上がる。でも失敗もたくさんします。コーヒーとかワインとかで紙すきができないか試したり、ワインは、色はきれいなんですけど、作業場中においが充満しちゃって(笑)。コーヒーも失敗しちゃって。飲む前の粉でやったので、全部水に浮いちゃって、紙の表

面がアスファルトみたいになってしまいました(笑)。

小林 私もいくつかの施設さんと関わっていますが、施設さんによって、どんなものをつくった方がいいのかを考えるのが得意な施設さんもあるし、そうじゃないところもある。高橋さんは得意ですね。

高橋 いえいえ。私はただ、大事にしてほしいんですよ。紙を。塩山ファクトリーには原料チーム、紙すきチーム、検品チームがあるんですけど、3つのチームが1つの流れでできてるんだよ、っていうのを、私は常々メンバーさんに言っているんです。さらにチームの中の作業をとっても、紙をすく人、枠を抜く人、バキュームをかける人、ローラーをかける人と、バトンがつながっていく。「私が上手に仕上げないと、次にバトンがつかない」という責任感を持って、一枚一枚を大事にしてほしいなっていうのがあって。

小林 なるほど。だからその商品開発なんですね。

高橋 このあいだ、あるリーダーさんが紙をピンセットでつ

まんだんですけど、メンバーに「そんな汚いものを扱いたいにしてほしい」って怒られてました(笑)。ああ、この3年で、紙一枚に対する情熱が育ってるな、とうれしくなりました。はじめはそんな情熱、なかったんですよ。紙パックの表面のフィルムを剥いたら、これに印刷すればいいじゃん、みたいな(笑)。わざわざ攪拌して、なんでめんどくさい紙すきやんなきゃいけないの、って。そこにはみんなの魂が入るんだぞ、って言っても、そんなのむずかしくてわかんない(笑)。みんなが手をかけて、紙すきの作業をして、だからあったかいいものができるとして、っていうのがはじめは分かっただけで、でも、今はみんなが、情熱を持った職人です、塩山ファクトリーは。



NTTクラリティ 高橋 久美子

小林 すばらしいと思います！

高橋 koroさんは、福祉施設から支援をお願いされることも多いと思いますが、支援の仕方でも工夫していることはありますか？

小林 工夫というものでもないんですが、基本的には施設さんが主体になって進められるようにしています。なにかあったときに一緒に悩む、みたいなスタンスですね(笑)。koroはもともと、自分たちが商品企画を施設に持ち込んで商品をつくっていただくことからスタートしているんですけど、今はサポートやコーディネーターとして入ってほしいというケースも増えています。そうすると、自分たちがいなくても、あるいは半年、1年関わった後で自分たちが抜けても、続けられるパッケージデザインのあり方とか、現場で変更がきくやり方などが重要です。せっかくデザイナーが入っているやっても、施設さんに渡したらなにも使われないまま、次の人たちにつないでいけない、というのではもったいないので。

高橋 今私たちがkoroさんにメモとペーパーペンのロゴデザインをお願いしています。末永く、大切に使ってほしいです。

小林 私はもともと金沢の福祉施設で7年働いていました。造形大学を出て、福祉施設で働きながら劇団の舞台美術をやっていたので、ものをつくるのがやりたくて。最初に勤めた施設で「ビーズ班」っていうのがあって、重度の障がいを持った人たちが集まっていたんですけど、そこでやっていたのは、タコ糸にビーズを通して、それをほどこ。これ、なにしてるんだろうって。もちろん、それなりに愛着を持ってやっていたんですけど、でもビーズを通すことができたのなら、それをなにかにできないのかな、って。自分たちのやることが形になって表れるものがないかなと思って、クリスマスに木の板ではめ込みのツリーを作りました。みんな色を塗って、飾り付けをして、玄関に飾ったら、つくった



小林 あかねさん



人が、自分がつくったんだと。しゃべれないけれど、指さしてアピールしていたり。そういうのを見て、自分の行為を形にするって、やっぱりいいことなんだな、って思いました。障がいを持った人たちが自分自身で形にできないから、誰かがやらなきゃいけない、それが原点だったんだと思います。

高橋 私も自閉症の子を持っているんです。言語発達障がいがあったりして、2週間に一度山梨から東京の病院に通わなくてはならず、仕事を辞めたんです。で、ちょっと落ち着いたのでちゃんとまた仕事をしたいな、と思った時に募集があったのがNTTクラリティの仕事でした。他の障がいを持った人たちとの関わりを持ちたいなと思って始めたんです。

小林 もともと福祉職なのかと思ってました。
高橋 違うんです。いわば「家庭内福祉職」なんです(笑)。でも本当に勉強になりました。自分の子と比べると気持ちがはじめはありましたけど、全然違うんだ、これでいいんだって、いまは家に帰るのが残念なくらい、仕事が好きです。

小林 この間うかがったときに聞いたのですが、今では営業もされるとか。

高橋 営業ってほどでもないんですけど(笑)。塩山の駅前に「甘草屋敷」という文化財があるんですが、そこに商品が置けないかと働きかけています。メンバーさんも、ご家族さんも、できた製品を買いたい、っておっしゃっていただくんですけど、なかなかそういう機会もなく、自分たちのお子さんがどういものをつくっているかわからなかった。「ここにいけば買える」っていう場所があったら、メンバーの励みになるな、と思っています。

小林 自分が「やったよ」って人に言えるものがあるってす

ごいですよね。

高橋 ご家族からも「買いたいです」っていう問い合わせが結構あるんですよ。

小林 デザインとか、ものづくりに関わっていると、最後は必ず商品になりますから、自分がやった仕事で形になって届けられますけれど、普通の仕事の中で、自分のやっている仕事を伝える方法がないから、こういうのが外に出ると励みになりますよね。

高橋 あるメンバーさんの話なんですけど、紙メモづくりはじめて、つくったものをどこかに運んでいるのは分かっているんだけど、どこに運んでいるんだろうって疑問に思ったらいいんです。で、毎週末、百貨ショップに行ったり、近所のスーパーに行ったりしている、っていうことをお父さんから聞いて。どうやらメモを探して市内中回っているんです、っていうお話を聞いたときに、もうこっちのほうが苦しくなっちゃって。あんなに毎日毎日一生懸命つくっているものが、どこに行っちゃっているんだろう、ってきつと思ってるんだな、って。ものすごい量をつくってるんで。

小林 それはすごい話ですね。

高橋 もう、せつないじゃないですか。だからいつかは、商品を手に入れる場所ができたらいいな、っていう思いがあった。「こんなものをつくっています」って言っても、やっぱり実物がないと、説明が上手な人たちじゃないですから。でもそれさえあれば「これ、僕がつくったんだ！」って言えるじゃないですか。だから絶対、みんなが買えるところで売りたいなって。そんな思いがあるんですよ。

小林 私たちもできる限り、自分たちで企画を持ち込んで商品を売ってということをやっているんですけど、施設さん

側からしたら「仕入れに来るただの人」と見られてしまうこともあります。私たちは一緒につくっていると思っているけれど、施設さん側からしたらそうでもないのかな、って思ったことがあって。たとえば素材は作れるけど商品にならない、という相談を受けて、いくつかの施設でつくった素材を組み合わせて商品をつくったことがあるんですけど、施設さんは自分たちで売ってあげないから「koroさんの商品」を手伝ってあげる、という姿勢で始まったんです。でも、新潟三越の催事であったり、万代島美術館のミュージアムショップに置いてもらったりして、ある程度誰もが知っている場所に置かれるようになって、みんな見に来てくれて、つくった人も、ご家族なんかは泣くくらい感動して。「こんなところに！」って。

高橋 そうなんですよ、本当に感動すると思うんですよ！

小林 百貨店や美術館に並べてもらって、全然知らない人が買っていきそうな場面を見かけると、うれしいじゃないですか。そうするとその後から製品の精度が上がったりとか、生産性が上がったたりしたんです。「売れる！」という実感が生まれたんだと思います。ちゃんと売ってくれてるんだ、しかも三越で、っていう。新潟には、ラフォーレ原宿・新潟っていう建物があるんですけど(笑)、そこに店出ると、若い職員さんなんかは、町の一番キラッとした場所に売っているのがとてもうれしく、目の輝きが変わるんです。その後、とても生産力が上がった、もっとうてみま、ああしてみますといった提案があったり。それまではせっかく商品を開発してもたくさんはつくれない、ということがあって、本当はもっとできるはずなのに、どうしたらこの職員さんのスイッチが入るんだろうと思ってた、ラフォーレだったんだ、って(笑)

高橋 それは分かる気がする(笑)。

小林 障がい者にとっても家族にとっても、職員にとっても、今までにない場所に自分たちの商品があることの驚きと喜びって、大きいと思います。自分たちではなかなか商品を出しに行けないかもしれないけど、誰か介する人がいれば、そういう場所まで届く。しかも自分も気軽に見に行ける場所で。東京のどこそこというよりも、三越とラフォーレが一番この職員のモチベーションをあげる。

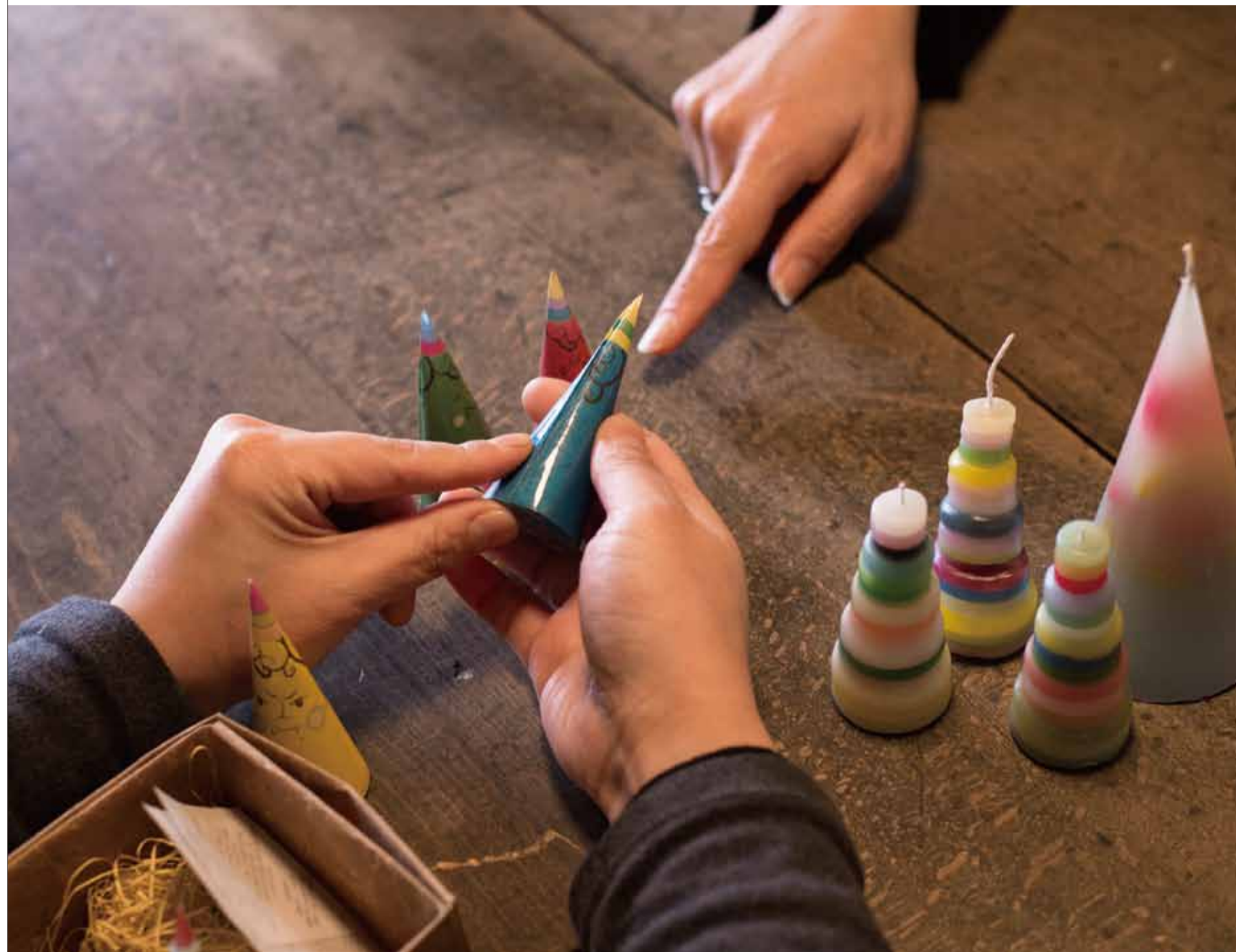
高橋 うちの目標は全国ですよ。「塩山ファクトリー」って言ったら全国の人があるくらい知名度上げようって言っています。

小林 まずは塩山なんじゃないですか(笑)？

高橋 そう、そうなんです！地元で有名なスーパー・オギノとかね(笑)。そう、まずはオギノ、オギノのレジ横を狙ってがんばります！

小林 あかね (こばやし あかね)
成安造形大学芸術学部デザイン科住環境デザイン卒業後、石川県金沢市へ移り住む。劇団アングルスに美術担当として参加。2004年より金沢市内の知的障害者入所施設、作業所、救護施設、障害児デイサービス、脳神経外科病院のデイサービス、カルチャーセンター各所において創作活動(造形、水彩画など)の講師を務める。2010年夏新潟に拠点を移し、福祉と社会をアートのちからでつなげることを目指し、「koro」として活動を開始する。

高橋 久美子 (たかはし くみこ)
NTTクラリティ塩山ファクトリーで、リーダーとして多くのスタッフとともに紙すきや、さまざまな商品の製造に携わる。福祉職の経験はないものの、自身も障がいのある子を持つ親としての経験を活かして、スタッフとコミュニケーションしている。最近ではファクトリーの製造管理だけでなく、新商品の開発にも携わるようになった。



「CLARTE」編集部、カーリング&チェアカーリングにチャレンジ!

ソチオリンピックでの女子日本代表の奮闘ぶりも記憶に新しいカーリング。実は北海道や長野などでは愛好家も多く、老若男女、多くの人を楽しんでいます。ここ「どうぎんカーリングスタジアム」は、札幌市内に2012年にオープンした新しいカーリングスタジアム。一年中、市民や大学生が気軽にプレーしています。

老若男女多くの人、と言いましたが、そこには障がい者も含まれているんです。「チェアカーリング」をご存知でしょうか。車いすに乗ったまま楽しめるカーリング。普通のカーリングと大きく違うのは「キュー」と呼ばれる棒状の器具を使って車いすに座ったままストーンを押し出すようにしてプレーすること。テレビ中継などでよく見る「スィープ」はやらないのも大きな違い。また、通常のカーリングは10エンド制ですが、チェアカーリングは8エンド制など、細かい違いはあるのですが、自チームのストーンを少しでもサークルの中央に近づけたほうが勝ち、という基本的なルールは同じで、だから一緒に楽しむことができるのです。

札幌カーリング協会では、2013年9月に、「ユニバーサルカーリング大会」を開催しました。1チーム4人で、その中には高齢者、子ども、障がい者が必ずいなければならない、というルール。あらゆる人が楽しめるスポーツ、とは言いますが、実際に一つのゲームの中でいろんな人が協力してプレーする機会は少なかったようで、新鮮で面白かった、ということでした。カーリングは、身体能力だけでなく、ゲームの展開や先を読む戦略性も必要なスポーツ。逆に言えば、体力のない子どもや高齢者、あるいは障がい者も、対等に戦えるスポーツ、ということでもあります。

そこで！今日は、カーリングの経験が全くない「CLARTE」編集部員が、チェアカーリングを始めて1年、チェアカーリング全国大会での優勝を目指す戸田さんに挑戦します。初心者でも作戦を駆使して

勝てないか、いざ挑戦。

とはいえ、まずは基本から。一緒にプレーして下さる札幌カーリング協会の五十嵐さんに、ストーンの投げ方から教えてもらいます。なるべく低い姿勢で、体を安定させ、足で「ハック」と呼ばれる黒い台を蹴って、ストーンを押し出す。何回か投げるうちに「なかなか筋がいい」と五十嵐さんにほめられたのに気を良くして、無謀にもさっそく試合へ。この間わずか数十分、さて、どうなるか?

実は、かなりの接戦でした。カーリングでは、1エンドにそれぞれ8回投げる機会があるのですが、クラルテ編集部員Sの奇跡のショットが次々と決まり、最後の1投までどちらが「ナンバーワンストーン(中央が一番近いストーン)」を取るのかわからない展開に。結局ナンバーワンストーンは取れず、得点を奪うことができなかったのですが、戸田さんも「正直あせりました」というくらいの善戦ぶり。本当は1エンドでやめようと思っていたのですが、納得がいかない戸田さん「このままでは終われない」と、もう1エンドの延長申し込み。こちらも慣れてきたことだし、返り討ちにして差し上げましょう!と意気込んでの2エンド目。…惨敗でした。まったくショットが安定せず、ストーンをサークルの近くに置くことすらできません。ピギナーズラックもここまで。6点という、カーリングでは考えづらい大量失点で終了。

しかし、面白かった!カーリングがこんなに面白いとは、知りませんでした。写真をご覧いただくと、みんなプレーを楽しんでいるのが伝わるかもしれません。思い通りのショットが決まった時の快感はもちろん、ショットが思い通りにならなくても、意外な決まり方をして驚いた、なんてこともあります。次、どこにストーンを置くのか、チームで相談したり、打ち合わせ通りのショットが決まった時に、喜びをわかちあったり。激しい動きはありませんが、けっこう体を使いますから、健康にもいい。ボウリング場のような感覚で、自分の住む町の近くにカーリング場があったら楽しいのに、と夢想しました。どうぎんカーリングスタジアムでは、初心者向けにカーリング教室を開催しています。ぜひこのスポーツを体験してみてください。

■チェアカーリングについての問い合わせ先
札幌カーリング協会 TEL.011-855-1200

いざ、

挑戦。



これで、キャンプにいける。 これで、生きていける。

—災害避難を支援し、活動領域を広げる車いす補助装置—

中村正善さん(株式会社JINRIKI)

「JINRIKI」は、車いすに取り付けることで、誰もが車いすをけん引でき、砂利や砂、段差なども楽に乗り越えることができる補助装置だ。長野県上伊那郡箕輪町にある株式会社JINRIKIを訪ねると、代表取締役社長・中村正善さんが「まずは実際に体験してみてください」と、試用させてくれた。

用意された車いすは、ごく普通の、どこにでもあるもの。砂利や雪、段差に見立て、マットや木製ブロックでつくられた障害物を、まずはJINRIKIを使わずに、車いすに乗って乗り越えようと試みた。

車いすに乗るのとはじめてだが、驚いたことに、たった数センチの段差を乗り越えることがなかなかできない。さらに体操用マットなど、すこしでも柔らかい地面の上では、ホイールを回すのに、とても大きな力が必要だ。大の大人が、大汗をかきながら力任せにホイールを回すが、ほんの数センチ移動するのが精一杯。車いすでの移動が、こんなに大変なものだとは、実際に体験してみてもじめてわかった。

今度はJINRIKIを使って車いすを動かしてみる。JINRIKIは、簡単な操作で、ほとんどすべての車いすに取り付けることができる。一人が車いすに乗って、別の一人がJINRIKIを引っ張る。すると先ほどの苦労がうそのように、わずかな力で簡単に動かすことができる。

「外に出てみましょう」とおっしゃる中村さんにしたが、JINRIKIを引っ張り外へ。「大丈夫ですから」という声に、半信半疑ながら積もっている雪の上に一気に乗り込むと、思いのほかスムーズに車いすが動く。多少力任せに操作しても、バランスを崩したり転びそうになったりすることもない。JINRIKIを使えば、人が歩ける場所の大部分を引っ張って移動できそうだ。

もともとは金融機関のシステム部門で働いていた中村さん。2011年に脱サラして株式会社JINRIKIをつくった。きっかけは東日本大震災。毎日のように流れる報道に衝撃を受けた。特に、車いすの人たちが逃げ遅れてしまうことを連想させる映像を見て、胸が痛んだ。弟さんが

障がい者で、小さいころから車いすを押して一緒にいろんなところに行っていた経験があったからかもしれない。自分でも「なにかできないか」と感じていたという。

「最初はボランティアに行こうと思っていたんです。でもなにか違うな、と思って」。みんなと同じ事をするのもいいが、自分にしかできないことはないか。考えてたどりついたのが、車いすの避難を支援する補助装置の開発だった。「1万人に1本、いや、10万人に1本でも売れば、自分ひとりが増えていくくらいはなんとかなると思って。根拠



はないです、勢いだけでしたね(笑)」。熱い思いだけで、それまで勤めた会社を辞めた。

リヤカーや人力車のように車いすを引っ張る装置をつくれれば、楽に車いすを動かせるというアイデアは以前から持っていた。しかし実際の開発には苦労した。使い勝手や重量、堅牢性など、クリアしなければならない課題は多かった。時には、800万円をかけて、ある工場に発注した試作機を、わずか3分であきらめなければならなかったこともあった。

JINRIKIの試作機を持って、三重県の津波避難訓練に参加したとき、中村さんはJINRIKIを開発した意味の大きさを知った。



三重県は南海トラフ沖地震で大きな被害が想定されていて、津波の避難訓練もよく行われている。「高台への避難は、実際は車いすでは難しい。障がい者や高齢者は「いざとなったら私のことは置いていってくれ」と言っている。彼らは、そういうことになった時点で人生はおしまい、とあきらめているんです」。JINRIKIを津波避難訓練で使ったら、上れなかった坂道が上れるようになった。その時、訓練に参加した車いすユーザーから「これで自分たちは生きていくことができます。ありがとうございます」と言われたことが、大きなエネルギーになっていると中村さんは言う。

障がい者スポーツのアスリートに使ってもらったときは、彼らの「ああ、これでキャンプに行ける」という言葉に衝撃を受けた。「なに言ってるの、この間は参加してたんじゃん、と私が言ったら、彼らは『あれは最初の一回だったから、みんなに迷惑をかけて参加できたんだ。もう一回は無理だと思っていたけど、これなら頼める』と言います。彼らが普段どれだけ遠慮して、行きたいところに行けないか、はじめて知った。「よく車いすの人は雨の日に出ない、と言う人がいますが、とんでもない。外に出ないじゃなくて、出られないんです」。

中村さんの熱い思いから、車いすの災害避難時の補助装置として開発されたJINRIKIだが、障がい者や高齢者の普段の活動領域を広げる装置として、さらなる可能性を秘めている。



ぬいぐるみがつむぐ、 旅の物語。

—ぬいぐるみが旅する旅行代理店—

東園絵さん(ウナギトラベル)

おそらくは世界でただ一つしかない、ぬいぐるみの旅行代理店が「ウナギトラベル」だ。ぬいぐるみが旅行、とはユニークだが、どんなものなのか、まずは実際のツアーの様子を紹介しよう。

ウナギトラベルの旅は、まずミーティングから始まる。ツアー参加者となるぬいぐるみたちが集まって、ツアーの行程を確認する。この日は東京ツアー。6体のぬいぐるみが集まった。

集合したら、東京の観光地を巡っていく。この日は、明治神宮から皇居を回り、お昼にもんじゃ焼きを食べ、浅草・浅草寺を散策し、東京スカイツリーの前で撮影、最後は夜の東京タワーで終わる盛りだくさんの内容。旅の様子はフェイスブックでリアルタイムに伝えられ、自分の「分身」をツアーに送り込んだ人たちが、あたかもその時その場を旅しているような感覚を楽しめる。

主宰の東園絵さんは、もともとは外資系の金融機関に勤務していて、旅行代理店などの経験はないという。しかし「ウナギトラベル」の発想の原点は、その外資系金融機関での体験にあった。「海外出張に行く機会が多かったんです。でも仕事して、食事や買い物をして帰ってくる、その繰り返しで。出張なんだから当たり前だけど、もっと現地の人達との接点を持ったら出張がもっと有意義になるんじゃないかなと思っていて。海外への渡航を繰り返す中で、人と人、特に海外の人とながらいたという思いをずっと持っていたという。

当時東さんは自分で書いていたブログに、ウナギのぬいぐるみを登場させていた。「ウナギが好きだったんです。ブログを書くのに、単純に私が書くよりも、ウナギのぬいぐるみが富士山に行ったとか、なにかを食べた、ってしたほうが面白いと思ったんです」。

次第に友人や知人が東さんのウナギのぬいぐるみ「ウナーシャ」を持って旅行や出張に出かけ、写真を撮って自分のブログにアップするようになったという。「そうすると私が東京にいながら、ウナーシャがニューヨークにいたりとか、ハワイにいたりとか、いろんなところに飛び回るんですね。もちろん私もニューヨークに行ったことはあるんですけど、その人の視点でウナーシャの写真が撮られるので、違う世界観をその人の目を介して見られるみたいな気がして、面白くなっていったんですね」。

もしかしら、なんらかの事情で旅ができない人にとっても喜んでもらえるかもしれない。病気や障がいなど何かの事情によって旅ができない人の喜びにつながる、さらに人と人をつなげることでできるサービスを出発点に「ウナギトラベル」は始まった。

「ウナギトラベル」が大切にしていることは、参加者、さら



にその参加者の分身が持っている背景をしっかりと理解すること。「ぬいぐるみをただの“モノ”として扱って、浅草寺の前で写真を撮っても、なんの価値もないし、喜びにつながらない。必ずそのぬいぐるみが持っている“背景”を感じ取ることで旅を演出することが大事です」。

実際にウナギトラベルの旅の様子を見ると、同じ場所にも、それぞれのぬいぐるみが異なる反応や行動をしているように思える。たとえばもんじゃ焼き屋さんに行けば、あるぬいぐるみのペアは普通に土手を作っているが、別のペアはハート型の土手を作っている。神社に行けば、「おばあちゃん」のぬいぐるみが、手水で手を拭くためのタオルを持ってきている。それぞれのキャラクターが見えるような、細やかな「演出」をしているのがわかる。

「ツアー参加の前に、なぜこのツアーに参加しようと思ったのか、ご自身の背景などをアンケートでとっています。ですから、ぬいぐるみが到着する前に、どういう動機で参加したのかわかります。それを汲み取って、持ち主にだけわかる演出や言葉かけをしているんです」。

ツアーに参加する人の背景はさまざまという。「障がいをお持ちの方や、ご病気の人もいらっしゃいますが、そうでない人も多い。それぞれがそれぞれの楽しみ方で参加してくださいと思っています。たとえば、家族で大切にしているぬいぐるみを参加させ、お父さんは会社から、お

母さんは自宅で、息子さんは大学の研究室から、それぞれが違うところで旅の様子を見ている、というケースもあるという。あるいは、14年間一緒に暮らした犬が亡くなってしまったご夫婦が、分身となる犬のぬいぐるみを作って、生きているときはできなかった旅行を楽しんでもらいたいと参加したこともある。

また、こんなこともあった。「ぬいぐるみにも自立するものがないものがある、撮影するときに、自立するぬいぐるみを支えることがあるんです。あるとき、車いすの人のぬいぐるみが、他の人のぬいぐるみを支えている、ということがありました。もちろん車いすのことは誰も知らない。その車いすの人に「支えてくれてありがとう」というコメントがついて、それがすごい嬉しかったといわれました」。

ウナギトラベルのツアーに集まったぬいぐるみ一体一体には、それだけで一冊の本になりそうなストーリーがある。

